

「努力は報われる」と考える子どもと学業成績の関連

小西 凌 (三重大学大学院)

研究目的

「努力には限界がある」という若年世代の諦めの議論は、1990年代後半から指摘されていたことであった。中でも荻谷(2000)は、努力の指標として学校外学習時間を取り上げ、その努力が約20年間(1979年～1997年)で低下し「努力しても仕方がない」という傾向が強まっていることを示し、学習意欲さえも親の学歴や親の職業と関係している、現代社会における意欲格差(インセンティブ・ディバイド)を指摘した(荻谷2001)。しかし、努力は報われないと閉塞的なのは、こういった若者層に多いのか、またその影響に関して、詳細な検討はほとんど行われていない。そこで、本研究では、「努力有効感」(努力すればたいていのことはできる)が、本人の「報われ」、ここでは、階層差が指摘される学業成績にどのように影響しているのか明らかにしていきたい。

先行研究

朴らは「日本人の国民性調査」における、「努力は報われると思う」との回答割合が25年間で低下傾向であり、その要因には、格差に関する意識の変化や、社会的孤立の自覚も大きく影響しているとした(朴・前田2015)。「つらいことに出会ったとき、それに耐え、更なる努力をして乗り越えることができるのは、それが報われる見通し、つまり希望があるからである」(山田2003)というように、報いや努力が見通せないことは、個人が将来を諦め、さらに社会は停滞を強いられる可能性がある。また、努力有効感は自尊感情など基本的な子どもの心身の健康を保つだけでなく、学習時間の上昇(Konishi et al. 2023)などの日常生活にも影響が現れており、それが長期的な目で子どもの将来にも大きく関わっている。本研究では、その影響の一つとして、学業成績の関連を検討したい。Research Question (1)努力有効感が高い子どもほど成績が高いのか、(2)子どもの努力有効感は成績に正の影響を与えるのか、(3)子どもの努力有効感を与える成績に対する正の影響には階層差があるのか

方法

使用するデータは、東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所が実施した「子どもの生活と学びに関する親子調査2015-2021」の2020年に実施された中高生(中学生とその親1783組、高校生とその親1770組)に関するデータである。努力有効感には、子ども調査票で問われた「努力すればたいていのことはできる」の指標をスコア化(とてもそう思う=4、まあそう思う=3、あまりそう思わない=2、まったくそう思わない=1)した変数を用いる。(ほか変数の作成は紙幅の都合上割愛)

分析結果

結果は次の通りである。第一に、努力有効感と成績をクロス集計した結果から、「努力は報われない」と考える層であるほど、成績が低位になることは示唆された。第二に、努力有効感は学習時間や希望進学段階を統制してもなお、成績に対し有意に正の効果を示していた。第三に、努力が報われると考えるほど成績を向上させるのは、階層中位と上位のみで、階層下位には影響を示さないという階層差が確認できた。以上から、努力有効感が低い層で成績が低く、さらに努力有効感が成績に与える正の効果は、階層下位には働かないということになる。このことは、階層下位において「努力が報われる」という前向きな見通しが、学力(成績)に結びついていないことを示している。つまり、努力有効感の影響は、階層下位において別のメカニズムが働いていると考えられ、例えば、学習すること以外の社会生活や労働意識などに働くことになるのだろうか。これが本研究の知見であり、新たな仮説を提示するものである。

キーワード：努力有効感、学業成績、階層